令和４年度　全国特別支援学級・通級指導教室設置学校長協会

第２回全国副会長研修会記録

＜出席者＞

○会長	・喜多　　好一（リモート）
○副会長	・大関　　浩仁　・高汐　　康浩 ・玉野　　麻衣
○北海道ブロック	・猪股　　嘉洋（札幌市立手稲西小学校） ・青田　佳寿紀（札幌市立手稲山口小学校）
○東北ブロック	・須藤　香代子（青森市立浪館小学校）
○関東甲信越ブロック	・廻谷　　敦士（宇都宮市立御幸が原小学校）
○東海・北陸ブロック	・半田　　憲生（西尾市立鶴城中学校）
○近畿ブロック	・東條　　和徳（東近江市立八日市西小学校）
○中国ブロック（欠席　資料交流）	・内田　　綾子（境港市立上道小学校）
○四国ブロック	・安永　　元生（松山市立津田中学校）
○九州ブロック	・西村　　真（鹿児島市立河頭中学校）
○事務局	・堀江　　朋子　・吉川　　光子

◆指導助言者（ご来賓）

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課　特別支援教育調査官

・加藤　　典子　様

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所情報・支援部総括研究員

・滑川　　典宏　様

日時：**令和４年８月４日（木）９時～12時**

会場：ホテルポートプラザちば　パールの間

司会進行　　田野　信哉

１　開会の言葉　　大関　浩仁

２　会長挨拶（来賓紹介）　　喜多　好一

・全国調査のお願いについて

・本研修会が特別支援教育のさらなる充実につながるよう期待している

３　来賓紹介

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課　特別支援教育調査官　　加藤　　典子　様

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所情報支援部　総括研究員　滑川　　典宏　様

４　議事　　進行　高汐　康浩

（１）主題設定の理由　喜多

課題①　特別支援教育を増やす工夫

・校内の教師間による交換授業や研究授業の実施

・担任外の教師による特別支援学級の専科指導

・通級による指導の教員による通常の学級における TT 指導

これらの具体策も含め、報告書の実現に向けて、各自治体で取り組まれている好事例を報告、交流したい。

課題②　各ブロックの設置校長会の取組状況等について

（２）各ブロックより課題について報告

【北海道ブロック】猪股　嘉洋

〇別紙　Ａ４　４ページについて説明

＜課題１について＞

校内体制の整備が年々厳しくなっているなかで、以下の３点について報告する。

①交換授業を通して、通常の学級担任は特別支援教育について理解を深め、特別支援学級担任は自身の専門性を生かし特別支援教育の理解を広げること、子供はより充実した授業を受けられる。

②校内研修、校内研究授業を通して個別の指導計画の理解を深め、子どもの困りに対する指導上の工夫の意図を通常の学級、特別支援学級の担任がわかりあうことができてきている。

③校内体制、校務分掌の工夫、例えば、「特別支援部」、「子ども支援部」を設け、学校全体で特別支援教育に取り組む体制や、支援の質を上げることにつながっている。

〇課題として、研修の時間質の確保の難しさ、通級指導担当が加配のため指導の見通しが立たないことがあげられる。新採用教員が特別支援学級担任の経験をするよりも交換授業等の研修を行ったり、通級指導担当を定数配置にしたりすることが望まれる。

＜課題２について＞

交換授業や研究授業の取組はこの１年で進んできている。今後行う、全道大会等の機会を利用し、文科省、道教委からの報告や通知に対する全道の設置校長の理解を深めていきたい。

【東北ブロック】須藤　香代子

〇別紙Ａ４　２ページについて説明

〇岩手県を中心に成果と課題を報告する

＜課題Ｉについて＞

〇教科専科の指導により、特別支援学級担任の個別の児童支援の充実や専門性を高めたり、同様に専科教員の指導力を高めたりする機会となっている。

〇教務主任が特別支援学級の支援や担任になることで将来の管理職候補として期待できること、また管理職が支援に入ることで子供はもとより、特別支援学級担任の支えとなった。

〇県内では、専科指導が取り入れられたり、新採用特別支援教諭に免許取得が必須となったりする等が進められている反面、50 代に年齢層が偏ったり、慢性的な人員不足の課題があげられる。

〇通級指導教室が自校になく、保護者の送迎による指導という難しさがある。

＜課題２について＞

岩手県の状況を中心に報告する

〇実態調査や研修会、県教委との懇談会を実施している。

〇特別支援学級の学級編成基準（Ｉ学級８名）の改善の要望活動を行った。

〇校長を対象とした行政研修に特別支援教育が含まれていないため、全校長の意識を高めるに至っていない。文科省の報告や通知を浸透させていきたい。

【関東甲信越ブロック】廻谷　敦士

〇別紙Ａ４　２ページについて説明

＜課題Ｉについて＞

以下の２点について宇都宮市を中心に教育委員会と学校の取組から成果と課題を報告する

①　特別支援教育経験者をふやす工夫

・委員会では、特別支援教育枠での採用や初異動の際に特学担任を勧奨している。また、教員マイスター制度としてベテラン教員と若手教員を組ませた実践的な研修も行われているが、業務多忙の折、希望者が少ないのが現実である。また、大学と連携し学生ボランティアの活用を進めている。

・学校では、力のある教員を特別支援学級担任等への勧奨を行っているが、結果、通常の学級が手薄になってしまう場合がある。

②　教職員全体の特別支援教育に係る資質の向上を図る取組

・委員会の研修により理論が高まり研修の質も向上している。学校の実際の場で、実践を繰り返すことが求められている。

③　課題

・通常の学級数および実践ができる期限付き教諭の人的配置が難しいため、特別支援教育に重点をおくことができない現実がある。

＜課題２について＞

〇役員理事の入れ替わりが激しく、ブロック全体の取組も難しい面があるが、コロナの状況を踏まえ、関東ブロック大会に向けての準備を進めている。

【東海・北陸ブロック】半田　憲生

〇別紙Ａ４　４ページについて説明

＜課題Ｉについて＞

〇校内（通常と通級、通常と特学）の教師間による交換授業や研究授業の実施

・各県の実態において違いはあるものの、概ね実施され、理解や研修を深める成果をあげている。

〇担任外の教師による特別支援学級の専科指導

・中学校では、全授業数のＩ／２を専科授業としたり、小学校では芸能教科を中心に担任外が専科授業をしたりしている。

〇経験豊かな教員が学校の枠を離れて、初任者を支援したり、特別支援担当指導主事作成による「学びのプリント」を研修に利用したりしている例がある。

＜課題２について＞

〇令和５年度愛知大会の準備及び各県においては、参集した研修を進め始めている。

【近畿ブロック】東條　和徳

〇別紙　Ａ４　２ページについて説明

＜課題Ｉについて＞

〇校内（通常と通級、通常と特学）の教師間による交換授業や研究授業の実施

・実施により、理解や研修を深める成果をあげている。定期的に特別支援教育推進会議の開催や新採用や転入６年までの間に特別支援学級担任を経験する取組もある。

・初任からＩ０年という期間にとらわれることなく、教員として十分力をつけた上で、特別支援教育の充実に努めさせたい。

〇担任外の教師による特別支援学級の専科指導

・小学校中学校ともに実態に応じて取り組んでいるが、中学校では計画的に担任の経験をさせたくても条件に合わない場合がある。

〇通級による指導の教員による通常の学級の TT 指導

・通級指導教室での対応が多く、TT 指導の機会が取れない課題はあるが、実施することで通常の学級担任が特別支援教育の理解を深めている。

【中国ブロック】内田　綾子

〇欠席のため、別紙　Ａ４　３ページを参照

【四国ブロック】安永　元生

〇別紙　Ａ４３４ページについて説明

＜課題Ｉについて＞

〇各県において授業研究、研修、特別支援教育推進月間の設置、市教委「教育支援室」の定期訪問、経験の軽重によるペアづくり、県特別支援地域リーダーを活用する等、様々に実践している。

〇増やすために、免許取得の推進の取組、人事交流、管理職や通常の学級担任の特別支援教育の経等の案を検討している。

〇報告の中で、経験の浅い担任が特別支援教育を担うことに不安を感じている。

＜課題２について＞

〇理事研修会、総会研修会、管理職を対象とした特別支援教育推進リーダー研修やセミナーへの参加が報告されている。

【九州ブロック】西村　真

〇別紙　Ａ４　４ページについて説明

＜課題１について＞

〇特別支援教育コーディネーターの指名率や通級による指導の巡回指導の割合等を数値目標とするなど、特別支援教育の充実に向けて熱を感じる県もある。

〇授業改善研修、通常の学級と特別支援学級との人事交流、自立活動を中心とする専門性向上研修を実施している。

〇学校の取組としても、初任者に特別支援学級担任の経験をさせたり、交換授業や研究授業、通常の学級と特別支援学級の人事交流、担任外の TT や個に応じた指導の充実に努めている。

＜課題２について＞

〇特別支援学級の増加による職員の未配置や教員の専門性の向上が大きな課題となっている。その中でも、オンラインやオンデマンドによる研修を進め成果をあげている。

（３）意見交換

＜課題１について＞

・東京都のある市では特別支援教室として拠点校から各校へ巡回指導をしている。障害のある生徒児童の問題行動が減ってきている。こうした事案を見て、ベテラン教員の中には免許を取得しようと希望する者が出てきているように感じる。

・反面、市によっては児童の交流学習はできても、教員の交換授業に制限がある状況もある。

・東京都では、特別支援教室（情緒障害通級指導学級）に保護者と児童が通うのではなく、巡回指導（毎週）という形で進めている。その方法が定着してきたため、巡回指導員と担任、家庭の連携ができてきており、担任は自分事としてとらえている。

・巡回指導担当教員には、非常勤の職員もおり、専門性が高くない場合には複数人で巡回したりしている。

・一例として、巡回指導員４名で対象校３校、50 名を複数で柔軟に指導をしている。

・その中で、どんな指導を受けているのか、実践力を積むことが人材育成で大切となってくる。

・通級による指導を担当する教員と学級担任が子どもの変容を共有することで人材育成につながることも実感できる。

・初任研でも通級指導教室の参観を受けることもできている。

・青森では、児童が通級指導教室に通う形で実施している。これは、学級担任をしながら別に指導できるメリットはあるが、巡回方式の指導では学級担任を外した指導員による指導が望まれる。

・また、冬期間の通級の難しさがあるため、巡回方式になることで通級の垣根が低くなることが予想される。

・巡回方式よる指導員の学習参観、交流はもちろん、同時に、通常の学級、特別支援学級の交流授

業等で個別指導計画を基にした指導の研修を通して、特別支援教育に対する教師の専門性の向上が望まれる

・ある発達支援センターの先生から、就学相談を受ける児童が激増しており、通級指導教室も増えていくのはないかと聞いた。しかし、職員採用の権限は県で、教室を作るのは市ということから、簡単に増やす対応はできないと聞いている。保護者のニーズに応えるために取組を進めていく必要があるが、その中で、通常の学級担任も障害について理解を深め、合理的な配慮を含め適切に指導できるよう専門性を高めることがやはり必要である。

・通常の学級で意識を高めてインクルーシブ教育を進めることと特別支援学級での指導を充実すること、どちらを大切にしていくといいのか考えることがある。

・体育大会を例に話したい。交流学級で一緒に応援合戦をすることが良いのか、特別支援学級だけで輝く姿を見せたらよいのか、迷ってしまう場面があった。

・その子に合った、その子の力を最大限に発揮する指導の場を考えることが大切。交流は何のために行うのか、何を求めるかによって交流活動の意味がある。

・学習発表会でも、特別支援学級単独で行うこと、交流学級で行うことのどちらかでも目的をもって行わせたい。将来の共生につながる教育活動を進めたい。

・様々に考え方があるが、特別支援学級の児童生徒の思いを大切にしたい。例えば、学級全体ではなく、一人一人違ってもよい。それを大切にした指導をしたい。

・第１回副会長研修会でも、こうした話題が出たが、必ずどちらかの活動とにするということではなく、各校の規模や実態に応じて、一人一人の思いや様子を大切にしながら、通年、隔年などの実施方法の工夫を加えて実施していくと良いと考える

・知的障害学級の担任を４年間したときに、楽しかったことを覚えている。体育で足の速い児童を活躍させたいと考え、通常学級の児童と一緒にリレーをさせたが、練習を終えると荒れることが多かった。様々な緊張や制約がそうさせたと考え、支援学級でのリレー練習も行った。子どもの思いに加えて、一人一人の背景や実態を深く考える必要がある。子どもの自己表現のために、力をつける特別支援学級でありたい。

・中学校では部活動に入っている特別支援学級の生徒も多い。こうした活動も自己実現につながっていると感じる。

＜課題２について＞

加藤　令和３年１月の中教審答申、有識者による報告会議、特別支援教育を担う教師の養成等の在り方に関する検討会議報告を受けて、影響があったかをお聞きしたい。

・特別支援教育を担う教師の養成等の在り方に関する検討会議報告の第３回で発表した。その発表で校務分掌に特別支援教育に関する「学びの支援部」について話した。北海道では、その後、こうした校内組織が激増しているように大きな変化が感じられる。反面、１０年以内に特別支援教育を経験するという縛りは難しいという意見が多い。こうした報告や通知は好意的に受け止められているので、運用で難しいところを工夫して、管理職も自分事としてとらえて進めていく機運を大切にしたい。

５　指導助言

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課　特別支援教育調査官　加藤　典子　様

【「特別支援教育を担う教師の養成等の在り方に関する検討会議報告」の実現に向けて】

各ブロックの発表から取組の手ごたえを感じている。今日は、今回の通知の考え方や趣旨を校長先生と共通理解したいこと、校長先生のマネジメントへ期待したいこと、そして、先ほどの話合いでも学びの本質にかかわる話題がなされていたので、それに関わるお話を最後にしたいと思う。

まず、特別支援教育をどうとらえているのか。特別支援教育は、障害のある子供たち一人一人の教育的ニーズを把握して、適切な指導及び必要な支援を行い、将来の自立と、社会参加の力をつけていくこと、その考え方は、共生社会の形成の基礎となる重要な考えとなっている、とある。

・学校教育の使命は、子供たちの調和の取れた育成をめざして教育を行うことである。

・そのためにこれまで特別支援教育に関わって積み重ねてきた知見、経験が学校教育の基盤となることを納得し、全体に落とし込んでいくことが必要である。

・特別支援教育は専門性のある人が担うだけでなく、全ての教員が担っているという意識が大切であるが、現場の状況では、まだ不十分と感じている。

・令和３年１月の中教審答申で示されている新しい特別支援教育の在り方を目指して進めてきているので、今一度現状と流れを再確認し、各ブロックで方向性を共有してほしい。

・特別な支援を必要とする子供が増えている現状からみると、全ての学校で特別支援教育がなされている状況だと考えている。

令和３年１月の有識者会議の中では、資質や専門性、養成や採用、人事交流の面から、方向が示されている。

・その中の研修の部分をみると、研修は知識習得だけではなく、課題解決型の実践的な研修が求められること、管理職の学校経営の改善充実が求められていること、小中高等学校に特別支援教育の経験を有する教員をふやしていくことが重要であると方向付けられている。

・これらのことを含め、「特別支援教育を担う教師の養成等の在り方に関する検討会議」が設置され、「報告」が出されたという流れになっている。

・特別支援教育は全学校で不可欠であり、特別支援教育について全ての教員に求められているという認識をもちたい。

・報道で話題となった「採用 10 年以内に特別支援教育の経験」ばかりに引っ張られる状況があるが、全ての教師に対し特別支援教育の知見や経験を蓄積する一例として挙げられているものである。

・報告書の「はじめに」と「おわりに」には、校長先生へのメッセージが込められている。

・「はじめに」では、地域の実情を踏まえ、何が強みで、何を補えばよいのかを考え現場の教育ビジョンに基づく取組次第であり、その具現化に向けてご尽力いただきたいことが書かれている。

・「おわりに」には、令和の日本型学校教育を支える柱の一つに、共生社会の形成に向けたインクルーシブシステムの構築のための特別支援教育の推進があるということが書かれている。

・これらの点を、学校の教員が自らの経験を踏まえて、口に出して語り合うことが必要だと考える。

・特別支援学級の経験は、自分のキャリア形成にとって良かったという声を聴くし、私自身の経験からもそう思う。

・授業するときに子供の声をどう受け止めることができるかが重要。通常の学級の集団であれば大体の道筋が予想できる。特別な支援を必要とする子供は一人一人状態等が違うため、要因や背景も含めしっかりと聴かなければならない。そのことがスキルアップにつながる。
・子供自身が自分のことをうまく表現できないことや、自己理解できていないことを、私たちがいかに解釈して理解をしてかを深めていくために、授業研ではこうしたケースを丁寧に扱い、自分事として考えていくことが大切。
・特別支援学級担任に指名されることを先生方は、どのように受け止められているのか？特別支援学級の担任の経験は自分の財産になることであり、教師としてのモチベーションを高めることとして捉えられる学校風土を作っていってほしい。
・子供が成就感をもって学びを進めていくために特別支援学級、通級指導教室等、様々な学びの場を用意している。その中でスキルを身に付け、高めながら、学びを進め、考えを尊重しながら、多様な共生社会の形成に向けてバランスよく教育活動を組み立てていくことが必要である。
・各ブロック内の学校間では、まだ温度差があると感じる。この通知に込められている特別支援教育を基盤とした学校経営の実現に向けて、全特協として、校長会として、一枚岩で取り組んでいただきたい。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所情報・支援部総括研究員　滑川　典宏　様
【特別支援教育経験者を増やす工夫について】

・報告書には、特別支援教育を重要な柱として位置付けること、専門性の層を厚くする仕組みをつくり、特別支援教育に係る経験を有する教師を増やすこと等が述べられている。
・特別支援教育は特定の教師のみに負わせられる課題ではなく、全ての学校関係者が教育の一つの大きな柱として正面から受け止めるべきものであるということにつながると考える。
・研究所の研究成果である「インクルＣＯＭＰＡＳＳ」を活用して、校内の課題を明確にした手立て検討してほしい。
例えば、「インクル COMPASS」の「体制整備」の項目について記入してみると、校長先生方の学校の現状と課題を振り返ったり、客観的に俯瞰してとらえることができると考える。また、実際に校長、教頭、教務主任、コーディネーター、通常の学級担任、特別支援学級の担任で「インクル COMPASS」を使用してみるとそれぞれの立場で結果の違いが出る。この違いや共通点を生かして、当事者意識をもった自校のインクルーシブ教育の構築に役立ててほしいと考える。
・特別支援教育の魅力や担当教員としてのやりがいを校長が校内の教職員に伝えていくことで、若い先生や未経験者が、特別支援教育にかかわる仕事をやってみたいと思うのではないかと考える。例えば、通級による指導の担当教員、特別支援学級の担任、通常の学級の担任が共に育てている子どもの成長を語り合う中で、共感する喜び、子どもを中心として気持ちを共有していくことが大切だと考える。現在、特別支援教育に関わっているものが、若い先生に魅力を発信すること、呼び掛けることも大切な役割りではないかと思う。
・報告書等をきっかけに、校内の特別支援教育を進めるチャンスととらえ、特別支援学級や通級指導教室が特別な場所でなく、身近な場所になってほしいと考える。

6　連絡事項

〇「特異な才能のある児童生徒への支援の在り方」資料の報告

・短期間に関わらず、たくさんのアンケート回答をいただき感謝する。当日は下記の項目についてヒアリングが行われた。

１．教育環境のあるべき姿について

２．今後、取り組む具体的な施策について

①周知・研修の促進

②多様な学習の場の充実等

③特性等を把握する際のサポート

④情報集約・提供

⑤実証研究

・全連小から全特協まで順次にヒアリング資料の説明を行い、質疑応答があった。

・今後はパブリックコメントの中で実証研究に取り組む予定である。

〇全国調査のお願い～８月 15 日を目途に、全特協ＨＰにアップする。ご協力をお願いする。

7　閉会の言葉　廻谷　敦士